

人々に愛された豪商

本間 泰蔵

本間泰蔵は、一八四九年、佐渡国（現在の新潟県佐渡市）に生まれました。^{*} 仕立屋の三男として育ち、



〔増毛町教育委員会蔵〕

「父と同じ道を歩みたい。」と、一人北海道に渡った泰蔵は、小樽の丸一松居という呉服店で働くことになりました。呉服店の主人は、泰蔵の商人としての心構えや仕事ぶりに感心し、店を取り仕切る役割を任せるようになります。

ある春の日、泰蔵は主人から「泰蔵、この反物を持って増毛^{ましけ}に行つて売り歩いてきてほしい。今の時期は、ニシン漁でヤン衆^{しゅう}たちも大勢来ているはずだ。」と頼^{たの}まれました。

泰蔵が増毛に到着すると、またたく間に黒山の人だかりができ、反物はあつという間に売り切れしました。ニシンの漁の景気のよさに驚いた泰蔵は、その後も増毛に足を運び、お客に頼りにされるようになりました。

泰蔵の主人は、「泰蔵は将来、商人としてきつと大きな

仕事をしていくだろう。私ができることはその才能を伸ばしてやることだ。」と考え、丸一松居呉服店を店じまいする最後の日に、泰蔵を呼びました。

「泰蔵、私からの気持ちとして、これを三百円で受け取ってほしい。」それは、店に残っている全ての商品、実際にはその倍以上も価値のある反物でした。

「なぜ私のためにここまでしていただけるのですか。」

「私は、たつた一人で佐渡から出てきて、何事にも一生懸命取り組み、努力と工夫を怠らなかつたおまえという人間にほれたのだ。その才能を活かしてもらうことが、今の私の一番の望みなのだ。」

「ありがとうございます。このご恩は決して忘れません。」泰蔵の目からは大粒の涙がとめどなくこぼれました。

ゆずり受けた反物を持って、増毛に移り住んだ泰蔵は、順調に売り上げを伸ばし、わずか数年で商売を成功させました。店で働く若い人にしつかり仕事を覚えさせ、きちんと給料を払う泰蔵の下には、多くの人が「働きたい。」とやってきました。また、人にお金を貸す時に、「期限までに返せなかったときはそれと同じ価値の物をいただきます。」と伝える泰蔵を見て、「この人は、きちんとした商売

をする人だ。信用できる。」と多くの人が集まりました。

一八八〇年には、大火事で商売道具の全てを失いますが、多くの人から助けを得て、すぐに店を立て直します。そして、大火事の経験を生かして、店を全て石造りにするなど、防災の工夫にも力を入れました。

ニシン漁業にも手を広げ、多くのヤン衆をまとめる網元あみもととなりました。当時のニシン場では酒を造ってふるまうことが多かったのですが、泰蔵は、役所から酒を造って販売する権利を得て正式に商売を始めました。丸一本間で造る酒は年々質を上げ、「国の誉」の名で売り出されました。

これが北海道最北の造り酒屋「国稀酒造」の始まりです。

また、当時は海上交通が主でしたが、荒波で欠航が多く、不便な状況でした。そこで、泰蔵は、「増毛の住民の中に船をもっている者がいれば、自由に物が運べて、みんなが不自由な思いをしなくてすむ。この町の人たちのおかげで今の私がある。今度は私がみんなのために力を尽くさねばならない。」と考え、大型船を購入しました。後に、「多少の荒波でも船を出してくれるので信頼でき



〔丸一本間のもち船の一つ「太刀丸」〕

る。」と評判になり、泰蔵の船による商売は大きな成果を上げ、十二艘以上の大型船をもつまでになりました。

大志を抱き、佐渡からたった一人で北海道に移り住み、商売という道を走り続けた泰蔵は、一九二七年、多くの人に惜しまれながら、七十七歳の生涯を閉じました。

今もなお、「国稀酒造」で造られる酒は人々に愛され、増毛町民の誇りとして語り継がれています。

一八四九	佐渡国（現在の新潟県佐渡市）で生まれる
一八七三	北海道（小樽）に渡り、丸一松居呉服店で働き始める（三十四歳）
一八七五	増毛町で呉服店を始める（三十六歳）
一八八〇	大火事の後、石造りの店を建てる（三十一歳）
一八八二	酒造りを始める（三十三歳）
一八八七	船による商売を始める（三十八歳）
一九二七	増毛で死去する（七十七歳）

* 仕立屋：衣類を作る商売

* 反物：和服の材料となる長い布

* ヤン衆：ニシン漁などをして働く男たち

* 網元：多くの漁師を集めて漁業を取り仕切る人

* 丸一本間：泰蔵がつくった店の、後の社名